

三つ子の魂、百まで…！

ある教育雑誌を読んでいましたら「親子関係と非認知的な心の力の発達」という題の短いお話が載っていました。筆者は東京大学教育学研究科の教授です。

そのお話の概要は

- 人の生涯のどの時期に、教育にしっかりとお金や労力をかけられると最も効果的かというところ、就学前、すなわち乳幼児期における教育の効果が絶大である。
- 乳幼児期に「非認知的な能力」の土台を築いておくことが重要である。
 - ※ 「認知的能力」… 頭のでき、頭の良さなどの学習面で発揮される能力。
 - ※ 「非認知的な能力」… 自己と社会性に関わる多様な心の性質。
 - ※ 自己に関わる力 … 自尊心、自制心、目標に向かって我慢強くやり抜く力、自律心など。
 - ※ 社会に関わる力 … 心の理解能力、共感性、思いやり、協調性、きまりを守る力など
- 非認知的な心の要素は、「自分が他人から信頼され、愛されているということに関する確信」を基にして積み上がっていく。
- 非認知的な力は、親をはじめとした大人と子どもの日常のごく当たり前の関係性の中で自然に培われる。
- 親子関係の中におけるアタッチメント（くっつく、触れあい）は自分と他者に対する基本的信頼関係の発達にとりわけ、大切な役割を果たす。
- 子どものアタッチメントの欲求に、親などの大人がごく自然に何気なく応じることで、人の生涯に亘る心身の健康や幸福の鍵となるもの、すなわち「非認知的な心の力」が豊かに立ち上がってくるのだということを、私たちはもっと自覚する必要がある。

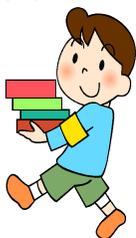
と書かれてありました。一言で述べると「子どもが「認知的能力（学力）」を身に付ける土台となる「非認知的な能力（自己や社会性に関わる心の性質）」を培う為には、幼少期に親子の触れあいが大切である。」ということだと思います。

先日、2回目の幼保小連携協議会を開催したところ、幼稚園、保育園の先生方から「近年体に触れられることを嫌がる幼児やだっこされると緊張する幼児が増えている。」という話がありました。また、泣く子どもにスマートフォンのアプリを見せ、泣き止ませる「スマホ子育て」が増えているというニュースも耳にしました。これは子どもと親の触れあいが少なくなっていることを表しているのではないのでしょうか。

この大学の先生のお話では、小学校から始まる学習の基礎は生まれてから間もない幼少期にあるということになります。昔の人は、経験から幼少期の関わりの大切さに気づき「三つ子の魂、百まで」という諺を残しています。今、その重みを再考しなければならない時代になっているのではないかと思います。



実りの秋にお願いしたいこと



先日行われた「ポプラ祭り」では、各学年の子どもたちが練習に励み、自分の目標をもってすばらしい発表をしてくれました。このように、秋は4月から取り組んできた教育活動の成果を発揮する時期になります。これから行われる、マラソン大会やテスト週間、読書週間などで子どもたちは少しでもよい結果を残そうとがんばることでしょう。例え、その結果が期待していたものと違うものであっても、がんばっている姿、努力を大いに認め、口に出して褒めてください。そのことで、子どもたちに自尊感情が生まれ、次へ挑戦使用とする態度が育まれます。家庭での御支援よろしくお祈りします。

